

養育者としての意識と性役割観との融和・相克

— 母親の語りに見られる“揺らぐ”姿 —

(教育心理学教室) 江上園子

A case study reveals maternal mental conflict by interview
Are mothers in or out of harmony with gender-role attitude?

Sonoko EGAMI

(平成26年6月16日受理)

問題と目的

「男性は仕事，女性は家庭」の反対派が賛成派を上回って久しい。近年では賛成派が一部の地域や女性で増加したとの報告(滋賀県男女共同参画審議会，2009)もあるが，調査開始の1979年当時からの大きな流れで見ていくとやはり近年では反対派が半数以上を占めつつあり，とくに若年世代に反対派が多い(石井クンツ，2013; 柏木，2013)。しかし同時に，職場などの公的な場での男女平等は少しずつ進められつつも，家事育児などの私的な領域ではそれが進まないという指摘(宇井，2002; 内閣府，2009)，理想と現実とは異なり，理念としては反対派としてカウントされるが実際には男性が稼働役割を担い，女性が家事育児役割を担っているという指摘(例えば石井クンツ，2013)もなされている。これらの指摘のほかにも，もともとは性役割観が対等・平等な夫婦のもとに子どもが生まれても，育児を通じて男女の性役割意識が固定化されているという研究は国内・海外を問わず，共通して多い(神谷，2006; Belsky & Kelly，1995)。実際，内閣府(2012)の調査では，女性は「子どもができて，ずっと職業を続ける方がよい」と考える人は47.5%と最大多数を占めるように見えるが，他の選択肢を合算すると49.8%の人が「子育て中は女性は職業を持たない方がよい」と考えていることがわかる。それが如実にあ

らわれているのが，先進諸国では我が国と韓国でのみ見られる女性のM字型就労である(柏木，2008)。同様に我が国では「子ども中心主義」の指摘がなされている(例えば柏木，2001)通り，例え共働きで男女平等意識を持っているカップルでも，子どもの誕生によって性別役割分担が強固になり，伝統的なものへと移行してしまうことも多い。それが個人の中にも折り合っていけば支障はないが，そうでないときの問題も多く散見されている。例を挙げるならば，専業主婦の育児不安が高い(牧野，1982)という事実，我が国特有の現象である“karoshi”，すなわち男性の過労死(柏木，2011)などである。

以上のような現状と並行しながらも，現代社会においては従来の伝統的な性役割観から距離を取ろうと促す社会的な働きかけも同時に見られている。例えば金井(2008)は男性の育児休業について，実際には取得が進んでいないまでも，法律の施行自体が男性の意識改革にとって大きな意味があると述べている。したがって，現代を生きる我々は，男性も女性も日々の生活や人生における何らかの局面において，いわゆる伝統的な性役割観へと引き戻されるベクトルと，そこから離脱することをよしとするベクトルの狭間にさらされていると言えよう。男性にとっては長時間労働が常態化する一方で，“イク

メン”・“カジメン”という言葉に代表されるように、ワーク・ライフ・バランスや父親の家事・育児参加の重要性が強調される状況がある(東野,2011)。女性にとっては三歳児神話の根強さから、子どもが小さいときの家庭専念は大事だと説かれる一方で、社会的・経済的な要請、男女共同参画の動きから共働きが推奨される時代でもある(船橋, 2006)。では現実的にこのような社会で男女が親となり、親役割を日々遂行していく中で、養育者としての意識と性役割観はどのような交わりを見せて自分の中に落ち着いていくのであろうか。船橋(2006)は伝統的な性役割観を示す「ジェンダー秩序」のベクトルについて、常に意識的に対抗していなければ容易にカップルの関係や役割分担に侵入してくるとし、家族の中の性役割を相反する 2 つのベクトルの動的な緊張関係として捉える見方を提示した。そうした「揺らぎ」は、量的研究においては誤差として埋没してしまったり、「多様化」という静的な形での表現に留まったりする。個人内の「揺らぎ」や自分で見出した「着地点」、ジェンダーベクトルの「変化の兆し」などは、研究者と当事者である協力者とが対峙してその場を共有する中で生じるものと言えるだろう(遠藤, 2007)。

そこで江上(2008)では、江上(2005, 2007)で作成された「母性愛」信奉傾向(社会文化的信念として存在する伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれに従って育児を実践する傾向)尺度(Table1 参照)を語りの刺激材料とし、この尺度に対する母親の意見を、印象や感想、個人のエピソードなども絡めて語らせることで、母親の中の性役割観の様相を調べた。その結果、これまでの量的な分析・検討では探ることのできなかった母親たちの“揺らぎ”や“迷い”“葛藤”などが浮き彫りとなった。なかには、大日向(2000)などで言われているように周囲の人間や社会に根強い「母性愛神話」があるがゆえに母親たちが子どもにうまく向き合えないという例も確かにあったが、逆に自ら「母性愛」信奉を引き受け、母親役割に意義を見出し自ら動機づけているような例も見られた。しかし江上(2008)では母親の「母性愛」信奉傾向の様相を質的にパターン化することは行っただけで、その中で「母性愛」信奉についての“揺らぎ”を示した母親について詳細に取り上げることはできていない。

これらのようなことから、本研究は、江上(2008)に

おいて「母性愛」信奉と親としての意識の間で“揺らぎ”が見られた母親を抽出して事例検討を行い、研究者と協力者との1対1での対面インタビュー調査の中で得られた性役割観への賛同・反対を軸にしなが、協力者の語りから「親としての意識の多重性と揺らぎ」と「揺らぎの中に見られる変化の兆し」に着目したい。相反する 2 つのベクトルの張力の中で日々の生活を送る中、それらに共感したり疑問を持ったりしながら、どのようにして養育者が新たな生き方を見出しうるのか、そのプロセスを考えたい。そしてその“揺らぎ”について自分なりにどのように落とし所をつけ、着地点を見出すのかということについても検討し、個人内で性役割観の変容が見られた例についても挙げ、その変容がどのような背景から生じたのか、考察する。本研究では、まずは「母性愛」概念と自分が親として抱く意識との間で“揺らぎ”が見られる母親が、それぞれどのように折り合いをつけているのかを調べる。さらに、母親の語りに見出せる個人内でのジェンダーベクトルの変容は見られるのか、審らかにしていく。これらのことを通して、母親が抱く

Table1 「母性愛」信奉傾向尺度の項目

-
1. 母親になることが、女性にとって存在のあかしと見なされる。
 2. 子どものためなら、どんなことでもするつもりであるのが母親である。
 3. 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何にもさしおいて母親が行うべきことである。
 4. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である。
 5. 母親であれば、育児に専念することが第一である。
 6. 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である。
 7. 子どものためなら、たいへんのことでは我慢できるのが母親である。
 8. 母親の愛情ほどに偉大で、気高く無条件なものはない。
 9. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女性のつとめである。
 10. 何といても子どもには産みの母親がいちばん良いのである。
 11. 育児に専念したいというのが、女性の本音である。
 12. 子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである。
 13. 母親の愛情はもちろん、子どもを自分よりも大切に想う気持ちや行動こそが、子どもには絶対に必要なものである。
-

“揺らぎ”の意味や個人内での変容のきっかけ、母親をとりまく環境のあり方について議論することとしたい。

方法

研究対象

本研究の対象者は、江上(2008)で協力を得た乳幼児を持つ女性 28 名のうち、「母性愛」信奉に関する“揺らぎ”が見られた「境界群」(Table2 参照)の 16 名中から、性役割観と自分の意識の間での葛藤が見られ、かつ語りのボリュームのある 2 名(A,B)を抽出した。さらに、過去から現在までのジェンダーベクトルの変容が明らかであった 2 名(肯定群の C と否定群の D)の合計 4 名である。この 4 名の基本的な情報は Table3 に示す。協力者は、江上(2005)の質問紙調査の際に面接調査へも協力同意を得た母親ならびにその母親たちの友人や知人である。面接に際しては協力者と十分なラポールを形成したうえで、書面と口頭による説明で守秘義務や研究目的を明確に告げた。面接の場所は協力者の自宅、大学の研究室、喫茶店などで協力者との事前の話し合いの際に決定した。すべての面接内容は協力者の承諾を得た後、IC レコーダーに録音した。テープ起こしは本論文の第一著者および心理学専攻の大学院生が行った。

面接内容

現在の家族構成や就業形態および教育歴などのフェイスシート項目と「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2005)を含むアンケート用紙に回答させた後、「母性愛」信奉について①「このような考え方についてどのように思われますか」、②「そのように意識されるきっかけなどはありませんでしたか」というインタビューを行った。①では「母性愛」信奉傾向に対する簡単な印象や意見を聴き、②では具体的な事態を想像させることで個人的な語りや印象的なエピソードを引き出すこととした。なお、「母性愛」信奉についての意見や感想などに良い・悪いということは一切なく、あくまで個人的な印象を述べることを目的としていることも強調した。インタビューは半構造化面接で行い、面接中は適宜、協力者にとってできるだけ自然な会話に近い様子で進めていけるように努めた。

Table2 「母性愛」信奉「境界群」の説明

グループ名	定義	人数	語りの例
肯定不可能群	「母性愛」信奉を肯定しながらも自分には不可能であるという語り	3	育児に専念、頭ではですね、それが大事ななって思うんですけど、実際自分にはちよつと無理かなっていう部分があるんで。
自分肯定群	自分は「母性愛」信奉を受容しているが女性すべてがそうではないという語り	6	子どものためならもう、「無償の愛」じゃないけれども、自分は死んでも守りたいと思うけど、それは皆が皆そうじゃないと思う。
部分否定群	「母性愛」信奉をある部分では肯定しその他の部分では否定する語り	4	確かに母親を必要としててうちの子もそうだけど、専念するのが第一ってなるといまの女性の生き方をすごい制限しちゃうんじゃないかと思う。
否定実行群	「母性愛」信奉を否定しつつも自分は実行しているという語り	3	男性も女性も助け合ってやるってのがベースになってるんで。ただ現実、どちらかっていうと私の場合は育児に専念している方なんです。

Table3 母親 4 名のプロフィール

年齢	家族構成	就業形態	教育歴	タイプ
A 25	夫, 長男(2歳)	専業主婦	大学院	部分否定群
B 28	夫, 長男(2歳)	専業主婦	専門学校	部分否定群
C 36	夫, 長女(2歳)	専業主婦	大学	肯定群
D 32	夫, 長女(5歳), 次女(3歳)	パート (看護師)	短大	否定群

結果

本研究は、まず、母親 A と B について語りを抽出し、それぞれ事例検討を行うこととした。以下、傍線は伝統的な性役割観が反映されている記述、波線は脱伝統的な

性役割観が反映されている記述である。それぞれの母親がどのように揺らいでいるのか、そして自分でどのように「落とし所」をつけているのか、見ていく。二重下線は、筆者が母親たちの語りから「着地点」「落とし所」を見出した部分である。

< A の語り >

- 自分が育ってきた関係の中で、自分の母親も専業主婦だったし、周りもほとんどそういうひとだったので、わりと、子どもは母親を必要としてるっていう視点はすごく、自分の中には、もともと先入観として、自分が選んだとか、判断したとかではなく、植えつけられていて、だからこそ、こう、子どもを園にあずけたりとかに対して、自分の中に声があってすごく悩むっていうのがすごく大きいですね。（記述 A1）
- でも、専念するのが第一ってなると、今の女性の生き方をすごい制限しちゃうんじゃないかと思うんですよ。いまだにそういう視点が社会の中にも依然あるから、産まないって人が多いんじゃないかと思ってるのね。だから、育児を専念してきたんだけど、育児だけをずっとやっていようとは思っていない（記述 A2）

このように、母親Aは伝統的な性役割観と通底するような「子どもは母親を必要としている」という思いが強い（記述 A1）と述べつつも、「育児をずっとやっていようとは思っていない」（記述 A2）と自分の中での揺らぎを語っている。この揺らぎに関する語りはこの後も少し続く（記述 A3）が、Aはこのような揺らぎや葛藤を自分でどのように意味づけ、折り合いをつけているのだろうか。

- 子どもをだけを見てると、やっぱり母親っていうのは必要とされているんだと思う一方で、仮に産んだからその子は私がいいかっていうのはわからない。やっぱり世話をしてくれて、困ったときに助けてくれて、いつでもいてくれるからなついてくれるのかなって気もするし。もし、逆で、父親が、

「子ども子ども」だったら逆なのかもしれないし。

（記述 A3）

- 長い目で見ると、仮に私が育児だけに戻って、一生送ってある程度たってパートしかできないって思ったときに誰が責任をとってくれるってわけじゃないんですよね。やっぱり自分の人生だから自分で設計していかなくちゃいけないし、ほんと誰か変わってくれるわけじゃないし、（中略）理想はやっぱり仕事と育児を両立してる母親だよな。（記述 A4）

Aは性役割観と自分の意識のはざまで葛藤していたが、「長い目」で今後の人生を見通し、最終的には「仕事と育児を両立する母親」という目標を述べていた。

< B の語り >

- （「母性愛」信奉に）賛同する部分はそうですね。何かそういう気持ちになったっていうのが正直な気持ちかもしれない。生まれてから。（記述 B1）
- なんていうんだろ、責任っていうのは母親になったらある、と思うけど、絶対母親だからっていう決まりはないし、父親だって、うん。子育てっていうか、やっぱり子どもがまるとその子どもを育てるっていう責任は父親にだってあるから、母親だけではないと思うんですね。（記述 B2）

母親Bは出産後、「母性愛」信奉のような「気持ちになった」と述べている（記述 B 1）。一方で、「子どもを育てるっていう責任は父親にだってあるから、母親だけではないと思うんですね」（記述 B 2）と揺らぎを語っている。その後、「母親になりきれていない自分がいた」（記述 B 3）という悩みを述べているが、Bはこれについても、最初は「なりきれていなかった」が、「次第に愛情もやっぱりわいてくるっていうか、自分がいないとだめっていうところもあるじゃないですか」（記述 B 4）と、性役割観に沿った形での母親としての存在意義を確認している。

- 最初ですね、私は、母親になるっていうことに、な

んだろう、なりきれない自分がいたんですね。

やっぱり今まで自分がやりたいときにいろんなことができるっていう自由があったけど、母親、っていうか子どもができちゃうと、それができなくなるでしょ？それがすごく嫌でたまらなかった。最初は、うん。(記述 B3)

- やっぱね、自分が見なきゃとかそういう、もう日々の積み重ねなんだろうけど、それによって芽生えてきたっていうのかな、なんか、愛情が。当たり前にもなってきたし。(中略)最初はもう仕方がないって気持ちの方が強かったけど、次第にね、子どもの表情とかをこー、見ると、笑顔だったり一番に覚えてくれることがママだったりするし、そういうのを見るとね、愛情もやっぱりわいてくるっていうかね、自分がいないとだめっていうところもあるじゃないですか。(記述 B4)

ここから、性別役割観についての揺らぎを見せつつ、最終的にはどのような性別役割観に落ち着いたのか、母親 A と B について事例検討を行う。

- またその自分の父親とか、彼のお父さんお母さんが生きてきた時代とは違う感じがするから、やっぱ高度経済成長期に父親は一流企業で働いて、母親は家庭にいましたってのは状況が違うから、やっぱり自分の身は自分で生計を立てれるようにしておきたいってすごく思います。(記述 A5)
- 小さいときの環境とかがその大きくなっての子どもの、子どもがこう成長しても人格形成につながるとかって言われてるじゃないですか。だからああそんなのかなって。(中略)自分の母親を見本にしている部分はあるかもしれない。なんとなく、お母さんにやってもらってたから、しようかなってところはあるかもしれない。見ててやっぱり。背中を見てるってほんとどなって。かゆいところに手が届く母だったから。なんか、やって欲しい事をやっぱり、やってくれるっていうか。帰って来て居心地がいいって感じかな。(記述 B5)

以上のように、母親 A は「時代の流れの認識」の結果、性役割観の揺らぎから脱伝統的な方向へ向かっている姿が見てとれる。対照的に、母親 B は「自分の母親をモデル化」することにより、性役割観の揺らぎが伝統的なものとして落ち着いている。

次に、現在(江上,2008 の時点)は「肯定群」「否定群」ではあるが、語りから過去からの性役割観からの変容が見られた母親 C と D について事例分析を行う。母親 C と D のプロフィールは Table3 の通りである。

< C の語り >

- 子どもが生まれるまでは、妊娠中とかは、もちろん一年経ったら仕事に戻るし、もっと早くでもいつでも仕事に戻ろうと思って子どもは保育所にあずけたいし、ちょうどいい仕事環境だったんで、保育所もあって、っていうとこだったんで、ちょうどいいと思ってたんですけど。(記述 C1)
- 生まれてみると、そばにいる方がいいと思って。生まれてから全然変わりましたね。仕事に行っても負担がかかると思いだして、それで仕事をやめました。(中略)私は多分こう、ひとつひとつ、家事でも何でもゆっくりなので、例えば朝に、仕事に行く時間に早く出ないとだめとかだったら、早くご飯を食べなさいとか早く服を着なさいとか、すごいね、自分の都合で子どもを怒ってしまったりしないといけないことがあったりと思うと、何の制約もない、ご飯を食べて服を着替えたら公園に行ってるくらいの生活の方がゆったりできるかなと。イライラしたりする理由がないんでね、時間に追われてない。あとはやっぱり、人に任せておけない感じはありましたね。ずっとそばにいないと、私がすごい心配に。何か、離れてられない、どうしてるやろ、どうしてるやろって。(記述 C2)
- 未だに歯医者さんとか髪を切りにいたりとか、免許の更新とか、そんなときしか離れていないですね。あ、でもすごい最近に、腹の立ったことがあってストレスがたまったか何かで、親戚のところにお

留守番してもらって一人で買い物にいったことありましたが、それがはじめてです。もう最近は大丈夫ですけど、パパとお散歩とか行ってもらうように私が成長しました。(記述 C3)

母親 C は、恵まれた職場環境であったこともあり、出産前は1年後に仕事に戻るという意思であった(記述 C1)にもかかわらず、実際に子どもが生まれた後、「そばにいる方がいいと思って、仕事に行って子どもに負担がかかると思いだして、それで仕事をやめた。」(記述 C2)と述べている。すなわち、出産前は脱伝統的な性役割観であったが、「育児での余裕の確保」・「子どもに関する心配」などが意識され、出産後は伝統的な性役割観を有するに至っている。母親 C は出産後、家庭での家事や育児に専念する生活を一年以上送っているが、散歩という短時間に子どもと離れられることを「成長」と語るなど、母親として子どもと一緒にいることが当たり前であり、それが自分にとってむしろ自然であり、自ら伝統的な性役割観を引き受けていることをうかがわせた(記述 C3)。

< D の語り >

- 子どもを産む前、一人で仕事してるときはやっぱりまた意見が違ったと思うんですよね。育児に入る、女性に向いている仕事だからするのが自然ってそれこそ何となく思ってたし。育児に専念したいとも思ってたし。(記述 D1)
- でも実際に入って、なんか子育てするのも結構きつい。仕事するよりかもうきついんですよね逆に。そういう意味では、主人は自分のやりたい仕事をずっと突き進んでやってきてるじゃないですか。同じなんていうかなそれぞれの自分のレベルで勉強してきて、ある程度の自分がやりたいことがやり出せて、女性には出産でそれを閉ざされるじゃないですか。それがちよつと納得いかなくなってきた。(記述 D2)
- 育児休暇が一年あるんで、その間は専業主婦なんですよ完全に。もう仕事にも行かないし、生まれただ

の子どもと一年間過ごすんですけど、その時点で、まずきついでしょ。家にいるんだけど、家のことができないんですよ。片付けはできない。だから子どものこと、子どもにおっぱいやって、寝たかと思ってさあ片付けしようかと思ったら泣きだす。なんで泣いているんだろうとかいう感じで。で、ご飯を、あの、昼になったら御飯を自分で作って食べないといけない。夜は夜で、主人が帰ってくるからご飯を作らないといけないって。何を一日やってたんだろっていう毎日が一年で。(中略) 子どもと一日中家の中にいたら、どうしてもこう、孤立化するから、行き場がなくて虐待する？人がいる気持ちもわからなくもないんですね。子どもが言うことを聞かない、帰ってきたらご主人が「ご飯を作っていないって掃除もしてないって、なんだこの家の散らかり方は、家に一日いたんだろ」って言われたら、もう行き場がないんですよ。わかってないお等さんって多いですもんね。だから、結局女だけがきつい思いをする。(記述 D3)

一方で母親 D は、出産前は育児に専念したいという気持ちを持ちつつ(記述 D1)も、実際に子育てが中心の生活になると、不公平感や負担感から「女性が出産で(やりたいことを)閉ざされ、納得がいなくなってきた。」(記述 D2)と述べている。つまり、出産前は伝統的な性役割観であったが、出産後は「子育て負担の大きさ」・「男女間での不公平感」などが意識され、脱伝統的な性役割観へと変容している。実際に母親 D は、育児に専念した1年間を振り返って記述 D3 のように回想している。自分の実体験と身近な母親たちの姿、周囲の人間の無理解などから伝統的な性役割観に対する疑問を大いに感じた様子であり、それについて調査の間を通して多く語っていた。

考察

本研究の目的は、「母性愛」概念と自分が親として抱く意識との間で“揺らぎ”が見られる母親が、それぞれどのように自分なりの着地点を見出しているのかを調べること(以下目的①)と、母親の語りに見出せる個人内での性役割観の変容の可能性を探ること(以下目的②)で

あった。そして最終的にはこれらのことを通して、母親が抱く“揺らぎ”の意味や個人内での変容のきっかけ、母親をとりまく環境のあり方について考察することでもあった。

その結果、目的①については、自分自身で“揺らぎ”や“葛藤”の落とし所・着地点を見出している母親は、親としての自分に適応していくプロセスの後半に在るのではないかということが推察された。性役割観と自分の意識との間での“揺らぎ”は自分の人生の意味づけの変化の動因となり、その動揺に対して自分なりの適応の方法を模索する姿が母親の語りから推測することができた。境界群の中で唯一、個人的な“揺らぎ”や“葛藤”に関する語りが見られなかった自分肯定群の母親は、自他に関する性役割観の見解における相違はあるが、自分の母親としてのあり方を他者とは切り分けて“主体的に”自分の人生を選んでいるため、“揺らぎ”自体が見られなかったのであろう。

目的②については、現代女性の人生の選択肢は格段に広がっている(岡本, 1999)という記述にもある通り、それゆえの“揺らぎ”や葛藤、迷いも見られていた。男性も、現代は稼ぎ手役割にこだわらない“新しい父親”の出現が報告されている(例えば大野, 2008)。しかしながら、本研究での母親 B や C のように、女性の中には個人レベルでは時代と逆行するような変化もまた生じているということもわかった。母親 B と C に共通している点は、第一子出産後に子どもの存在に対する感情が大きく揺さぶられているところであろう。それまでは性役割観が脱伝統的であったとしても、はじめての子どもを目の前にして自分の母親としての動機づけが高まり、結果的に性役割観まで変容してしまうということが推察された。興味深いのは、いずれも周囲からの要請や期待などの影響については語らなかった点である。小坂・柏木(2007)では、育児期の女性において、夫や夫の親からの就労反対が要因となり退職を選ぶという結果が報告されたが、本研究ではそのような周囲からの要求から性役割観が変容したわけではなく、母親自身が自発的に伝統的な性役割観に迎合していく姿が印象的であった。

結論として、母親が性役割観と自分の意識のはざまで“揺らぎ”つつも、社会・周囲・パートナー等からの圧力から強いられたライフコースに甘んじることなく、自

分の中に生じた認知・感情・意思を自覚しそれに従い主体的に意味づけた生活なのか、そうでないかが重要であるということが示唆された。実際、江上(2008)で明らかになっているように、否定実行群や肯定不可能群に代表される、信念と実態が解離している母親は、自分の生活や人生の中での現在の意味づけにおいて相対的にかなりネガティブな内容が多かった。一方で、「母性愛」信奉が高くとも自分でそれを主体的に“選び取って”おりながら、女性一般にその選択を強いるような意識はない自分肯定群の母親たちは、自分の母親としての日々の生活を迷いなくポジティブに語っていた。それでは、女性が主体性を発揮できるために社会や周囲の環境として求められることは何だろうか。船橋(2006)は、伝統的な性役割観を示す「ジェンダー秩序」のベクトルは、常に意識的に対抗していなければ容易にカップルの関係や役割分担に侵入してくると指摘している。この現代社会でも、女性には常に伝統的な“ケア”役割へのジェンダーベクトルが作用している。したがって、大局的には脱伝統的なジェンダーベクトルを、ソフト面でもハード面でも社会が受容・承認していくことが少しでも多くの女性の主体的な生き方を保障することにつながるのではないだろうか。

最後に今後の課題について論じたい。第一には、「母性愛」信奉傾向が概念として内包する問題の整理を行う必要がある。「母性愛」信奉傾向尺度は江上(2005, 2007, 2013)などのこれまでの先行研究においてもすべて次元性が確認されている。しかし、大和(1995)によると性別役割分業意識には二つの次元すなわち「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」があり、それぞれ関連する母親側の要因が異なるという結果も示している。「母性愛」信奉傾向尺度も、女性であるがゆえの育児役割にかかわる項目もあれば、「子どものために」という子どもへの愛情を重視したがゆえの責任にかかわる項目も含んでいる。量的な研究に置いては次元性が確かに実証されていても、今回のように質的な研究を行うことにより、母親がその二つを分けて捉えている可能性とその分けたことによる“揺らぎ”の記述も見出された。したがって今後は「母性愛」信奉傾向がこれら二つの要素を持っていることを認識し、それぞれどのような母親の要因と関連するのか、それぞれ母親の心理や

行動をどのように導くのか、検討していくことが重要であろう。

次に、縦断研究の意義が見出されたことも課題として挙げる。調査当時には“揺らぎ”が見られなかった母親2名も、過去からの性役割観の変容は確かにあった。2名の変容の方向性は異なるが、そのきっかけとなったのが、第一子出産であった。国立社会保障・人口問題研究所(2012)にもあるように、第一子出産を機に家庭に入る女性は未だに6割を超える。そのひとつの要因として、先述したように眼前にあらわれた子どもの世話やそれにかかわる感情が関係しているのではないかと思われる。神谷・菊池(2004)は第一子出産後、夫婦の親役割観は調整されてはおらず、むしろ育児期を通じて差が大きくなること、そこには家族外部の社会からの影響があることを明らかとしている。海外でもこの傾向が見られ、Belsky & Kelly(1995)は夫婦が親へと移行する間のこの軌轢を“分極化傾向”と呼んでいる。もちろん、本研究の母親Dのように、第一子出産を機に性役割観が脱伝統的に移行する女性も見られるが、いずれにしろ、子どもの出産を機に自分の性役割観の変容に直面する母親が存在することは見逃せない。この現象にかかわる要因や個人差について分析するためにも、産前産後の縦断研究を行うことが肝要である。

さらに、徳田(2004)が時間的広がりの中で個々の人生の意味づけを捉えることが重要であると指摘しているように、母親の過去や現在に関する語りだけではなく、母親が抱く今後の“展望”や“見通し”についての検討も行っていかなければならない。とくに、子育て期の母親における“未来”に関する語りは母親の生き方に関する考え方については性役割観と関係する。なぜなら、現在は子どもが小さく、世話や養育の負担や愛情のやりとりの度合いがおのずと大きいものであろうとも、いずれは子どもの自立に際してその割合が縮小していくはずであるからである。それを踏まえうえで母親たちがいま、自分の未来をどのように語るか、そこに母親たちの主体性はあらわれるのか、それぞれの母親でどのようにあらわれるのかということ进行分析することが、重要であると言えよう。

文献

- Belsky, J. & Kelly, J. (1995). *The transition to parenthood*. New York: Dell.
- 江上園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全. *発達心理学研究*, 16, 122-134.
- 江上園子 (2007). “母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連. *心理学研究*, 78, 148-156.
- 江上園子 (2008). 子育て期にある母親の「母性愛」信奉傾向における主観的な意識. *お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間文化創成科学論叢*, 11, 421-430.
- 江上園子 (2013). 「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響—父親と母親の「母性愛」信奉傾向の交互作用に着目して—. *教育心理学研究*, 61, 169-180.
- 遠藤利彦 (2007). 「質的研究という思考法」に親しもう。秋田喜代美・能智正博(監修) 遠藤利彦・坂上裕子(編) はじめての質的研究法—生涯発達編—. 東京図書
- 船橋恵子 (2006). *育児のジェンダー・ポリティクス*. 勁草書房
- 東野充成 (2011). 変わる働かされ方, 働き方—労働法制の変化と自己責任の論理—. 多賀太(編著) 揺らぐサラリーマン生活—仕事と家庭のはざまで—. ミネルヴァ書房
- 石井クンツ昌子 (2013). 「育メン」現象の社会学—育児・子育て参加への希望を叶えるために—. ミネルヴァ書房.
- 神谷哲司 (2006). 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化についての個性記述的検討 — 3事例の縦断的量的データと回想的面接調査による質的データから—. *鳥取大学地域学部紀要 地域学論集*, 2, 367-388.
- 神谷哲司・菊池武剋 (2004). 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化. *家族心理学研究*, 18, 29-42.
- 金井篤子 (2008). ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて. 柏木恵子・高橋恵子(編) *日本の男性の心理*

学—もう1つのジェンダー問題—. 有斐閣

- 柏木恵子 (2001). 子どもという価値——少子化時代の女性の心理. 中央公論新社
- 柏木恵子 (2008). 子どもが育つ条件——家族心理学から考える. 岩波書店
- 柏木恵子 (2011). 親と子の愛情と戦略. 講談社
- 柏木恵子 (2013). おとなが育つ条件——発達心理学から考える. 岩波書店
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2012). 国立社会保障・人口問題研究所年報.
- 小坂千秋・柏木恵子(2007). 育児期女性の就労継続・退職を規定する要因. 発達心理学研究, 18, 45-54.
- 内閣府 (2009). 平成 21 年版 男女共同参画白書 佐伯印刷
- 内閣府 (2012). 男女共同参画社会に関する世論調査<<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-danjo/index.html>>
- 大日向雅美 (2000). 母性愛神話の罫. 日本評論社
- 大野祥子 (2008). 育児期男性の生活スタイルの多様化——"稼ぎ手役割"にこだわらない新しい男性の出現. 家族心理学研究, 22, 107-118.
- 岡本祐子 (1999). 女性の生涯発達とアイデンティティ—個としての発達・かかわりの中での成熟—. 北大路書房
- 滋賀県男女共同参画審議会 (2009). 若年者の男女共同参画に関する意識についての検討結果<概要>. <http://www.pref.shiga.lg.jp/shingikai/danjo-shingikai/jakunensya/files/jakunensya_kekkagaiyou.pdf>
- 徳田治子 (2004). ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ——生涯発達の視点から. 発達心理学研究, 15, 13-26.
- 大和礼子 (1995). 性別役割分業意識の二つの次元——「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」. ソシオロジ, 40, 109-126.
- 宇井美代子 (2002). 女子大学生における男女平等を判断する基準：公的・私的・個人領域との関連から. 青年心理学研究, 41-55.

付記

本研究は 2014 年 3 月に行われた日本発達心理学会第 25 回大会(於・京都大学)の自主シンポジウムで発表した内容の一部を論文化したものであり, 平成 20 年度-22 年度科学研究費補助金若手研究(B)『『母性愛』信奉傾向が養育態度に与える影響の解明—量的・質的な検討の併用—』(課題番号:20730417)による助成を受けた。シンポジウムの共企画者である大野祥子先生(白百合女子大学), 話題提供者である澤田忠幸先生(愛媛県立医療技術大学)・神谷哲司先生(東北大学), 指定討論者である福丸由佳先生(白梅学園大学)・柏木恵子先生(東京女子大学名誉教授)ならびに調査にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

